

◎食のリスクコミュニケーション・フォーラム 2020 (4回シリーズ)

『消費者市民のリスクリテラシー向上を目指したリスクミとは』

第1回テーマ：『ゲノム編集食品～新たな育種技術のリスクミ～』(オンライン)

【開催日】 2020年6月28日(日) 13:00~17:50 (最大延長: 18:00)

【開催場所】 オンライン会議 (Google Meet)

【主催】 NPO 法人食の安全と安心を科学する会 (SFSS)

【後援 (交渉中)】 消費者庁、東京大学大学院農学生命科学研究科附属食の安全研究センター

【協賛 (交渉中)】 日本生活協同組合連合会、一般社団法人食品品質プロフェッショナルズ

【対象】 食品関連行政の担当者、食品事業者の広報・お客様相談・品質保証担当、リスク研究者、マスメディア、消費者団体・市民団体、など

【定員】 **先着 50名 (オンライン会議のため増員の可能性あり)**

【講演会参加費】 3,000円/回 (事前に銀行振込をお願いいたします)

***SFSS 会員、後援団体・協賛企業 (口数により人数制限)、メディア (取材の場合) は無料**

【参加申込み】 http://www.nposfss.com/form_riscom2019.html (6月25日で受付終了)

***SFSS 会員も各回の参加申込みが必須です (4回自動登録される訳ではありません)**

【お問い合わせ】 SFSS 事務局まで (TEL/FAX: 03-6886-4894、email: info@nposfss.com)

【本フォーラムの主旨】

毎回、食のリスクに詳しい有識者をお迎えし、講師3名 (Q&A 含み 60分) + 総合討論 (90分) : 13:00~17:50 の構成とします。総合討論では、消費者市民の安全・安心につながる食のリスクコミュニケーションのあり方について、参加者の皆様からの質問に講師が回答する形で議論します。

【事故防止対策等】 フォーラム開催に際して、事故防止及び公衆衛生の措置に留意し、十分に講じます。特に、今般の新型コロナウイルスに関しては、十分な感染症対策等を講じることとします。

【各講師のご紹介&講演要旨】

① 田部井 豊 (農研機構)

『ゲノム編集作物の開発状況と規制状況について』

ゲノム編集技術は、目的とする DNA 配列のみを特異的に改変できる優れた技術であり、医療分野や創薬、有用物質生産、農業分野など幅広く利用されることが期待されています。その社会実装には、規制のルール、知財、国民理解など考慮すべきことが多くあります。日本では、2019年にカルタヘナ法および食品衛生法上の基本的な取扱ルールが定められ、商業利用に先立ち、義務ではないものの情報提供が求められています。その後、文部科学省や経済産業省、農林水省、厚生労働省などから、情報提供にかかる詳細が示されています。これらの取扱ルールについて概要を紹介します。

② 江面 浩（筑波大学生命環境系）

『ゲノム編集トマトの開発と社会実装について』

精密かつ効率的に生物の遺伝子機能を調節・改変できるゲノム編集技術が登場し、様々なライフサイエンス分野での利用が加速しています。ゲノム編集技術を用いて、品種改良が高速化できることから、農作物の品種改良(育種)の分野でもこの技術に対する関心が急速に高まっており、今後利用拡大が予想されます。本講演会では、何故、作物育種でゲノム編集技術への関心が高まっているかを理解するために、1) そもそも作物とはどんな植物なのか、2) 育種とはどのような作業なのかを説明し、続いて、3) 事例としてゲノム編集トマトの開発とその社会実装に向けての私見を紹介します。

③ 佐々 義子（特定非営利活動法人くらしとバイオプラザ21）

『ゲノム編集食品に対する消費者の受け止め方』

日本で開発されたゲノム編集食品の登場を前に、食品としての安全性確認、環境影響評価の仕組みが整い、表示の方向性も定まりました。昨秋からは申請者のための相談窓口もスタートしました。遺伝子組換え食品のリスクではボタンの掛け違いが起こったといわれますが、早期から情報発信、議論が始まったゲノム編集食品を消費者はどのように受け止めるのでしょうか。ゲノム編集食品が、消費者から健全に選択されるようになるには、何が必要なのでしょうか。ゲノム編集食品に対する様々な意見を整理しながら、一緒に考えたいと思います。

以 上